

# 「サモア服が好きですか。それとも、輸入服が好きですか。」 —女子高校生の服装観からみた<サモアらしさ>の再構築に関する一考察—

“Which clothes do you like to wear in your daily life, Samoan clothes or imported clothes?” :  
The reconstruction of the *fa'aSamoa* through girls' college perception of clothing

倉 光 ミナ子 Minako Kuramitsu

## 1. はじめに

1990年代以降、複合的に加速化していくグローバル化は世界のあらゆる「場所」に均質化・同質化の波をもたらすと同時に、それぞれの「場所」の価値を見直し、さらにはそれをより強固なものとして再構築する差異化の波も運んできた(Harvey, 1996)。このような状況において、マシーはグローバル化とローカル化の相互作用こそが「場所」の特異性(the specificity of place)を再生産していくと主張している(Massey, 1996)。しかし、その一方で、実際の「場所」で生活する人びとはとりわけ国際移動者によってもたらされる変容を目前として、自らの「場所」のアイデンティティを単一で排他的なものとして再構築していく傾向が高いことも証明されている(May, 1996を参照)。このように、グローバル化の中において、「場所」をいかに捉えていくのかという問題は地理学の主たる課題の一つになっている。こうした関心に基づいて、本稿は、南太平洋の島嶼国家であるサモアを事例に、<サモアらしさ>というものが再構築されていくプロセスについての考察を試みたい。

サモア(旧西サモア)は1962年に南太平洋地域で最も早く独立を果たしながら、最も独自の伝統・慣習を保持している国であるといわれている。サモアでは、<サモアらしさ>と考えられるその独自の伝統・慣習は概して「ファアサモア(*fa'aSamoa*)」という概念で語られるが、それは単なる民族アイデンティティではない。例えば、サモアの歴史学者である Meleisea は「ファアサモア」について次のように説明している。

サモア人が彼らの政治的・経済的システムと称するように、ファアサモアはサモア人に非常に奥深い意味を伝えている：本質において

明確だが、詳細において柔軟性をもつ (clear in essentials, flexible in detail)。それは単なる反動的なナショナリズムではなかったし、今でもそうではない(中略)。サモア人はファアサモアをアイガとヌウの社会構造とマタイとフォノの権威に基づいた行為のためのフレームワークとして認識しているので、新しい実践、概念、そして、モノは受容されるし、ファアサモアに組み込まれていくから、その体系は本質において不変のままであるか、あるいは根本的に変化したとは認識されないものである(Meleisea, 1987: 16-17)。

Meleisea が指摘するように、「ファアサモア」は基本的にサモア独自の社会システム(マタイシステム)<sup>1)</sup>を基盤とした日常生活に欠かすことのできない概念であるが、その一方で、柔軟性を持つために、何を「ファアサモア」であるかとするのかはその時々々のコンテクストによるといえる。しかし、実際にサモア人の口から「ファアサモア」が語られるときはもっぱら他者の習慣との比較に基づくことが多い。この点に関して、例えば山本は、今日サモア人による「ファアサモア」の説明は、しばしば「ファアパラギ(白人の慣習)」との対比によって行なわれ、サモア人はこの区別が物質文化や生活文化に関わる時は「ファアパラギ」の方が優れているとみなし、モラルや人間関係に関する限り、「ファアサモア」の方が優れていると考えているという(山本, 1997: 171)。また、彼女はマタイシステムにとって重要な儀礼交換を行なわない人びとや、行ないたがらない人びと、そして西歐式家屋やパン、ソフトドリンクといった海外からの輸入物を好む人びとを、サモア人が「フィアパラギ(*fia palagi*: 白人かぶれ)」と呼んで非難することも指摘している(山本, 1997: 171-172)。このようにみると、<サモアらしさ>とは外部の日常実践を意味する「ファア

パラギ」と対置される形で認識され、再構築・再生産されているといえよう。

本稿では、現代のサモアの日常生活において、こうした<サモアらしさ>がいかにも再構築されているのかを考察するために、「衣」をめぐる日常実践を取り上げる。「衣」をめぐる日常実践は、身体を保護するという意味において、人間の生活に欠かすことのできない基本的なニーズであると同時に、アイデンティティや規範といったものを目に見える形で表す文化であり、そしてその変容は移りゆく社会を反映する鏡である。こうした「衣」の重層的な特徴は次の2点においてグローバル化とローカル化の相互作用のプロセスを考察するのに興味深い視座を与えてくれる。第1に、「衣」は日常実践でありながら視覚的に訴える力をもつために、しばしば「場所」の特異性を明示する役割を果たす。この点に関して、例えば、ホルンダーは「伝統衣裳の創りだす視覚的効果は、守りつづけられてきた慣習を確認し、たとえ慣習が変わろうとも、安定した意味を希求する態度は変わらないのだということを示すように機能するのだ。伝統衣裳は規範なのである」と述べている(ホルンダー, 1997: 28)。実際に、ブルージーンズに代表されるような国際的なファッションの影響は各地域の規範を失わせるような印象を目に見える形で与えることにある。そして、それに対抗する手段として、しばしばナショナルアイデンティティや民族アイデンティティを表象する民族衣裳の着用が好まれたり、推奨されたりする。このように、「衣」はグローバル化とローカル化の相互作用を映し出し、「場所」を再構築していく力を秘めているのである。第2に、「衣」をめぐる日常実践は、とくに衣服の着用で示されるように、たとえ同じ社会であるとはいえ、世代やジェンダーによって著しく異なっている。基本的に、日常実践のレベルにおいて、グローバル化がもたらす外部のモノを積極的に取り入れていくのは若い世代である。そして、とりわけ女性たちが外部のモノに新しい価値を付与していく状況も報告されている(例えば、ワトソン編, 2003)。その一方で、グローバル化の状況では、民族衣裳を通じた民族アイデンティティやナショナルアイデンティティの維持はもっぱら女性の身体を媒体にするとも論じられている(千田, 2002: 133)。したがって、世代差とジェンダー差を明確に示す「衣」

の日常実践は、誰の日常実践がローカルのコンテクストにおいてどのような意味をもつのかという点を、さらに、誰によって「場所」の特異性が維持されようとし、あるいは再構築されようとしているのかという点を考える手がかりになるだろう。これらの点から、本稿では女子高校生が語った“サモア服”と“輸入服”に関する語りに注目し、それを基に<サモアらしさ>について考えてみたい。

本稿は以下3章から構成される。まず、2章では、「衣」の日常実践における<サモアらしさ>の状況を概観する。具体的には現代のサモアにおける服装規則において、いかに<サモアらしさ>が考えられているのか、その特徴を明らかにする。次の3章では、2001年に実施した首都アピア近郊の女子高校生の語りを紹介することで、彼女たちが考える<サモアらしさ>の特徴をまとめる。そして、最後に、2章と3章の結果を通して、サモアの「衣」の日常実践から考察される<サモアらしさ>の再構築について考察を試みたい。

## 2. <サモアらしさ>と女性の服装

本稿の舞台であるサモアが位置するポリネシアには、もともと刺青に代表されるような豊かな裸族文化が栄えていた。その状況を大きく変容させたのは19世紀にポリネシアにやってきた福音主義の宣教師たちである。彼らの布教活動ではポリネシア人をキリスト教徒にするために、キリスト教徒のありふれた日常活動を教育していくことが重視された。その一部として強調されたのがポリネシア人にキリスト教徒の服装、すなわち西洋服を着用させることであった。こうして、ポリネシアの衣文化は裸族文化から衣服文化へと変容をとり、西洋服自体は地域の社会的・文化的文脈に即した形でローカル化してきたのである。

サモアでは、1830年に始まったロンドン伝道協会の活動により西洋服の着用が始まったが、現代ではサモア独自の衣生活が営まれている。サモア人は普通、Tシャツとラヴァラヴァ(腰布)を着用するが、特別な状況ではある種の服装スタイルがあり、それは成年の男女間で異なっている(表1)。様々なコンテクストにおいて、何が「適切な服装」であるのかという点が問題とされるのは女性の服装に関してであり、それは服装規則

表1. サモアにおけるジェンダーと服装スタイルの一例

状況	男性	女性
儀礼交換・「伝統的」な踊り	上半身：裸 下半身：膝丈の腰布	プレタシ*
教会（福音主義系）	白を基調 上半身：長袖カッターシャツ ジャケット ネクタイ 下半身：イエ・ファイタガ (厚手の布地で作られた腰布)	白を基調 プレタシと帽子
職場 (官公庁やオフィスなど)	制服、あるいは 上半身：開襟シャツ 下半身：イエ・ファイタガ	制服、あるいは プレタシ ワンピースなど

(筆者の観察に基づいて作成)

注) これらは主要なスタイルであり、例外は存在する。

\*プレタシの基本形は下衣がラヴァラヴァの2ピースである。

フ・ヴァエをはくことができますが、それ以外はだめです。これはいまだに私たちの文化の一部なのです。彼ら（大人が男性の意味）は特に女の子たちに気をつけています。男の子たちは自由です。彼らはどんな種類のスポーツでもできますから……それぞれの村にはそれぞれの組織があります。彼らには彼ら自身のルールがあります。いくつかの村では、特にタウンエリア（アピア中心部）に近いところでは女性は自由にオフ・ヴァエを着ることが出来ます。[しかし、サマタウ村では]もし道でオフ・ヴァエを着たいなら、あなたはラヴァラヴァでそれを隠さなければなりません。

(2001年11月、村出身の30代の女性)

(dress-code) というもので観察される。

首都アピア周辺とそこから離れた「村」と呼ばれるところを比較すると、女性に対する服装規則は基本的に「村」で顕著である<sup>2)</sup>。「村」の服装規則はマタイたちによるフォノ（村の自治組織）によって独自に定められているため、その内容、強制力、それに反した場合の罰則などには差がある。しかし、概して首都アピアに近い「村」より遠隔地の「村」、そしてアピアの位置するウボル島よりサヴァイ島の「村」の方が服装規則は厳しいといえる。

いくつかの「村」で説明された服装規則には次のようなものがある。

#### <モアタア村の場合><sup>3)</sup>

女の子（girls）だけは、村では、長ズボンやショートパンツを着用することは許されません。つまり、女の子は、オフ・ヴァエ（ズボン類）をはいて、村の道を歩くことは許されません。もちろん、女の子はオフ・ヴァエ自体をはくことはできますが、それを隠すために、その上にラヴァラヴァを着用しなければなりません。ちょっと、暑いでしょう？

(2001年11月、村出身の20代の女性)

#### <サマタウ村の場合><sup>4)</sup>

—女の子はオフ・ヴァエをはくことができるのですか。

スポーツをするときだけ、女の子（teine）はオ

#### <サシナ村の場合><sup>5)</sup>

—村でオフ・ヴァエを着ることはできないのですか。

マタイは、ラヴァラヴァを着用することを強調します。なぜなら、オフ・ヴァエは“パラギ服（'ofu palagi）”だからです。もし、あなたがオフ・ヴァエを着たら、それはパラギの服を着ていることを意味します。そして、それは我々の伝統的な生活スタイル、つまり「ファアサモア」を失わせることにつながるのです。もちろん、バスに乗るときには、オフ・ヴァエを着用することはできますよ。でも、村の周辺で見せてはいけません。男の子たちは、ショートパンツやバミューダパンツをはくことができます。しかし、女の子たちは、兄弟がいるところで、ショートパンツとトップを着てはいけません。これは姉妹と兄弟の関係（フェアガイガ）です。姉妹たちは兄弟を尊敬しなければなりません。もし彼女たちが肩や胸の辺りを兄弟たちに見せるならば、それはとても無礼です。

—でも、アピアではその必要はないですよね。

はい、アピアは違います。あそこは街です。たくさんの人々が異なる村々からやってきます。彼らはやりたいことを何でもすることができます。しかし、ここは村です。マタイによるルールが強調される村なのです。

—服装規則を守らないと、どうなるのですか。

そのような人々は罰せられます。彼らはブタか、イエ・トガ<sup>6)</sup>か、あるいはお金を払わなければ

なりません。もし、何度も規則を破るならば、その人たちは村から追放されるでしょう。

(2001年10月、村出身の40代の男性)

「ファアサモア」と関連づけて考えると、これらの服装規則の特徴としては次の3点が指摘される。第1に、「村」では、ズボン類を着用することと腰布を巻くことが対置して捉えられている。そして、前者は「ファアパラギ」と捉えられ、「ファアサモア」を失わせるもの、後者は「ファアサモア」と捉えられ、「村」で「ファアサモア」が維持されているのかどうかを明示する役割を担っている。しかし、第2に、ズボン類を着用する行為すべてが「ファアパラギ」として認識されるのではなく、それは女性がズボン類を着用したときのみ適用されるといえる。「村」の公的な場(道や広場)において「ファアサモア」を失わせるようなズボン類を着用することが禁じられているのは基本的に女性たちである。そして、特に若い女の子たちがズボン類をはくことは一様に好まれない。第3に、例えばサシナ村の服装規則にあるように、この服装規則の執行域は「村」の領域内に限定されている。例えば、「村」を離れていくバスの中でよく観察される風景は、若い女性たちがバスに乗ったとたん、腰布をとってズボン姿になるというものである。これらの3点から、「村」の服装規則はそれぞれの「村」における「サモアらしさ」を示すものであるが、もっぱらその役割を果たすのはどこにおいても女性の服装であると考えられる。

一方、首都であるアピヤには「村」とは全く異なる種類の服装規則が存在する。例えば、サモア国立大学には、大学の図書館を利用するにあたり「適切な服装」を定めた服装規則がある<sup>7)</sup>。規則の前文には、第1にそれが「サモアの慣習(Samoan customs)」に基づいたものであること、第2に、高等教育機関である大学において「無難で好ましい(safe and acceptable)適切な服装」をすることが重要であること、そして、第3に、大学という高等教育機関ゆえに文化的価値を維持していくことの大切さが訴えられている。しかし、次に示すように、その内容は男性と女性によって微妙に異なっている。

#### ＜女子学生に対する規則＞

- ・ショートパンツ、あるいはホットパンツ(膝より上のとても短いもの)は、どんな時でも〔着用を〕許されない。
- ・アンダーシャツ(singlet)、チューブ型のTシャツ(spaghetti-type tops)、そして肩のみえる服装は許されない。
- ・ビジネススーツ(executive suits)あるいは正しいプレタシ(表1注参照)以外のミニスカートそしてミニドレスは許されない。
- ・あらゆる種類のシースルーの服装は認めない。

#### ＜男子学生に対する規則＞

- ・シャツとTシャツ以外のアンダーシャツあるいはタンクトップは図書館で着用すべきではない。
- ・バミューダパンツとカーキーパンツ以外の、ホットパンツあるいはスポーツ用のショートパンツは認めない。
- ・ラヴァラヴァを着用する際は、膝の下の長さでベルトをつけること。

女性に対して禁じられた服装は、特に若い女性たちの中で好まれている服装であり、とりわけアピヤ中心部や若者が集うナイトクラブにいくと観察されるものである。一方、男性に対する規則は若い男性たちが外出する際に好む服装というよりも、むしろ男性たちが自宅でくつろいでいる時の服装に類似している<sup>8)</sup>。このように、女性に対する禁止事項の方が多く、細かいこと、そして、そこに若い女性たちの中で最近人気のある外出用の衣服が含まれていることから、この服装規則はもっぱら女子学生を対象にしたものであると考えられる。

「村」と大学の図書館における服装規則のあり方から、「ファアサモア」と服装の関係性について次のようにまとめることができる。まず、「村」の服装規則はマタイたちによって管理され、日々再生産されている「ファアサモア」の日常実践の一部である。しかし、それは、日常実践でありながら、同時に「ファアパラギ」と対置する「ファアサモア」を視覚的に明示する役割も担っている。一方、首都アピヤの周辺では概してマタイシステムが形骸化しつつあるため、日常実践としての服装規則の効力は弱い。しかし、サモアの独立に伴って出現してきた公的空間はサモアの文化価値や

慣習を明示する場所として位置づけられており、そこでの服装はやはりパラギ（白人）の服装とは異なる「品の良い（respectable）服装」をすることが求められる。そして、何よりも重要なのは、この「ファアパラギ」の服装を禁じられ、「ファアサモア」の服装をするように求められているのもっぱら女性たちであるという点である。

### 3. アピアの女子高校生の服装観

#### 3.1 調査の概要と背景

サモアにおけるいくつかの服装規則から推測するに、「衣」に関する日常実践においても、何が「ファアサモア」であるのかという点はどのような服装をするのか、そして、それが「パラギ（白人）の服装なのか」それとも「サモア人の服装」なのかという対置において認識されているといえる。そして、「サモア人の服装」をしているのかどうか問題となるのはもっぱら若い女性たちの服装についてであると推察できる。これらの点から、本章では「ファアサモア」を維持するための服装規則における主たるターゲットであり、かつ次世代の「ファアサモア」の担い手でもある10代の女の子たちに焦点を当てて、彼女たちが自分の着用している衣服をどのように考えているのかをみていきたい。

使用する一次資料は2001年5月にサモアにおける家政科教育の状況を概観するために、アピア近郊のSカレッジで実施した質問票調査に基づいている。Sカレッジはアピア中心部から車で10分程度のところに位置するカソリック系の女学校である。この調査の主たる目的は学生たちが選択科目である家政科を選んだ経緯を調べることであったが、同時に質問票の最後には彼女たちの服装観を概観するために「日常生活において、あなたは、“サモア服（Samoan clothes）”と“輸入服（imported clothes）”と、どちらの服を着るのが好きですか」という問いを浴せた<sup>9)</sup>。質問票は最終的に2000年に家政科を選択した学生のうち17名から回収された。最後の問いに対しては、サモアにおいて最も変容しているのはアピア周辺の若者の服装であり、とりわけ10代～20代の若い女性たちは海外から入ってくる露出度の高いキャミソール、スカート、そして、ジーンズといった既製服の着用を好む傾向があるのにも関わらず、17

名のうち8名がサモア服を、9名が輸入服を選択していた<sup>10)</sup>。これらの結果に基づいて、さらに学生たちがどのように2つの衣服の違いを捉えているのかを調べるために、同年6月に5名の学生を対象に英語で簡単な聞き取り調査を実施した。

#### 3.2 サモア服と輸入服の違い

聞き取り調査では、まず、学生たちに改めて“サモア服”と“輸入服”について定義してもらった。なお、5名の学生のうち、サモア服を好んで着用すると答えたのは生徒リマだけであり、残りの4名は輸入服を好んで着用すると答えた。

生徒リマ：[サモア服とは] イエ・ラヴァラヴァ（腰布）、そして…私たちが毎日着る服。[輸入服とは] 私が街へ行くときに着るもの。[私が街に行くときに着るのは] ジーンズに、Tシャツかな。

生徒タシ：[サモア服は] 古い時代の着方。できるだけ長くくるんで、何人かの人びとがしているように足を見せないようにすること。えっと、輸入服はね…だってプレタシでは働けないでしょう。だって、それは教会に行くときに着なければならぬじゃない。だから、働くとき…農作業するときなんかには、ジーンズを着なければならぬの。

生徒ヴァル：[サモア服とは] えっと、プレタシとシアポ（樹皮布）。[輸入服は] 私が店から買う服や海外から来る服。それに、それは我々の文化じゃない。つまり…それは、我々の服ではない。

生徒ルア：[サモア服とは] えっと…それは私たちの文化的な服のこと。[輸入服は] そうね、私たちは普段はイエ・ラヴァラヴァ（腰布）を着て遊ばないわ。だからジーンズやショートパンツを着て遊ぶの、スポーツの時。<筆者：スポーツの時に着る服が輸入服ですか？>そうよ…つまり、スポーツの時に楽なのよ（make you feel comfortable）。イエ・ラヴァラヴァは快適じゃない。[2つの服の違いはね] 最近では、ミニスカート…ええと輸入服は外出用（for go out）なの。私たちはプレタシをきて、外出しないし、ナイトクラブにも行かないわ。もちろん、私はナイトクラブにいけないけどね。プレタシは…教会で着る服よ。

生徒フィツ：[サモア服は] イエ・ラヴァラヴァとプレタシ。[輸入服は] ジーンズ、ミニスカート、Tシャツ。その違いはね…私たちには私たち自身の伝統があるのよ。だから、知っているでしょう、葬式、結婚式やフェアウ (feau) をしに行くときは、プレタシやイエ・ラヴァラヴァを着なければならぬ。サオファイ (マタイの就任式) でもね。でも輸入服は…ジーンズ、ミニスカートやTシャツは私たちの…そう新しいファッションなの。だから人々は輸入服を着るのが好きなのよ。

彼女たちの説明は確かに質問票に合わせた意図的なものとして捉えることもできるが、ここからは少なくともサモア服と輸入服の区別が次の3点に基づいて行なわれていることが指摘できる。第1点は、その服がサモアの文化や「伝統」を示すかどうかである。これに従えば、サモア服はサモア独自の文化であり、輸入服はサモアの文化とは関係がないとされる。第2点はどのようなときにその服を着るのかである。それによると、基本的に活動的な時、あるいはアピアへ外出するといった娯楽時には輸入服を、日常、教会、儀礼交換などで「ファアサモア」の日常実践が強く求められる場ではサモア服を着用することになる。第3点はその服がどこから来たのかである。つまり海外からやってくる既製服は名が示すとおり“輸入”服であり、“サモア”服とは認識されないのである。

### 3.3 サモア服と輸入服の選好理由

次に、学生たちに日常の生活においてサモア服と輸入服のどちらを好んで着用するのか、その理由を答えてもらった。

#### <生徒リマの場合>

— どうして、サモア服を着る方を好むのですか。  
だって、私はそれを毎日着ているもの。それに教会へ行くときもね。[カソリック教会に行くとき] 私はいつもプレタシを着るの。白いプレタシか、エレイ (樹皮布の凶柄) のプレタシを。  
— でも、自宅ではジーンズやTシャツを着るのでしょうか？  
いいえ、ときどきだけ。

— どのような服が最も心地よいのですか。

Tシャツとラヴァラヴァ。でもそんなに長くないモノ。

— お母さんは、あなたの服装について厳しいですか。

ええ。イエ・ラヴァラヴァのように長い服を好むの。だって、ジーンズとかは持ち込まれた衣服だから。彼女はサモア服をきてほしいのです。

#### <生徒タシの場合>

— どうして、輸入服を着る方を好むのですか。

えっと…えっと…わからないわ。

— 日常では、サモア服と輸入服と、どちらを着ていますか。

輸入服。ショートパンツ…それにTシャツ。

— 両親は、あなたの服装に厳しいですか。

ええ！彼らはとても厳しいです。特に、お母さんが。

— ショートパンツをはくことができるのですか。

ショートでも長いショートのこと。本当に短いショートパンツはだめなの。

#### <生徒ヴァルの場合>

— [輸入服はあなたの文化ではないのに] それでも輸入服を着る方を好むのですか。

そうよ。だって、私は毎日プレタシなんか着られないもの。なぜって、プレタシはね…私は1ヶ月に一度、あるいは年に5回ぐらいしかプレタシを着ないわ。特別なときにね…例えば学校の文化の日とか。それを毎日では着ないわ。でも私は毎日輸入服を着るもの。

— 日常生活では、どのような服装をするのが好きですか。

毎日？そうね…Tシャツとショートパンツ。短いショートパンツ。

— 両親は、あなたの服装に厳しいですか。

時々ね。例えば、ミニスカートのような良い格好でないもの (not good looking) を私が着るときね。お父さんは今、アメリカ領サモアに行っていないから、私はお母さんと待っているの。そう、特に彼女は厳しいわ。

— 彼女は、あなたがミニスカートををはくのが好きではないの？

ええ。とても短いものはだめね。

— でも、短いものをはきたいのですか。

いいえ、そんなに短いのは、はきたくないわ。

#### <生徒ルアの場合>

— どうして、あなたは輸入服を着る方を好むのですか。

今日では、私たちは、普通輸入服（Tシャツやジーンズ）を使うわ。私たちはプレタシを使わないわよ。（中略）ただ、お客が来る時だけ、親戚が私の家に来る時は、私たちはイエ・ラヴァラヴァを着なければいけないのよ。そうね…これが私たちの文化だっているのを見せる感じで。お客が入ってくる時はイエ・ラヴァラヴァを着用するわ。

— 日常生活では、どのような服装をするのが好きですか。

輸入服…ジーンズね。ミニスカートは着ないわ。だって、心地よくないもの。

— 両親はあなたの服装に厳しいですか。

教会に行く時だけね。彼らは私にミニスカートをはくことを許さないわよ（笑）。

#### <生徒フィツの場合>

— どうして、あなたは輸入服を着る方を好むのですか。

だって、私の友達をみると、彼女たちは輸入服を着ているもの。だから、私も輸入服を着るのよ。

— Tシャツとかを着ている時、「輸入服を着ている」と考えることはありますか。

いいえ、そんなふうには考えないわ。私はそれを着ているだけ。私の体をカバーするために。そうね…あまり「見せびらかさない」ようにね（not show off）。

— 両親はあなたの服装に厳しいですか。

いいえ、彼らは気にしないわ。

これらの聞き取りから、学生たちによるサモア服／輸入服の選好は次の3点によって左右されているといえる。第1点はプレタシの着用の仕方である。5名のうち3名の学生は「サモア服＝プレタシ」という前提から、どのようにプレタシを着用するのかを考えた上で、自分の着たい服がサモア服かどうかを答えている。つまり、プレタシを日常的だと考える学生はサモア服を着たいといい、プレタシは“特別なとき”にしか着ないものと考え

える学生は日常では輸入服を着用すると答えている。第2点は、学生たちは心地よいと感じる服を日常的に好んで着用することである。学生たちの語りは彼女たちが「何を毎日着用するのか（自分が着て過ごしやすい服は何か）」→「それは、改めて問われてみると、サモア服と輸入服のどちらになるのか」という思考に基づいて選好を決めていることを示している。彼女たちにとって、日常の衣服とは自宅で着用するTシャツ、ショートパンツやジーンズ、あるいは腰布である。そして、当然のことながらこれらが「サモア服」であるのか、「輸入服」であるのか明確に分類するのは難しい。さらに、これに関連して、第3点は露出の程度である。例えば、日常的にショートパンツやミニスカートが着用できるのかを確認すると、学生たちは必ず「はけるけど、あまり短くないもの」という限定をつける。また、両親が自分の衣服にまったく気にしない生徒フィツでも「適切に体を包む」という点は重視している。要するに、どのような服を着るのかという点において、彼女たち問題とするのは着ている服が“サモア服”か“輸入服”かではなく、“露出する服”か“露出しない服”かであるといえる。

#### 4. 女子高校生服装観からみる<サモアラしさ>

調査で得られた女子高校生たちの服装観は、サモアにおける「衣」をめぐる様相が当然のことながら「ファアサモアを表象するサモア服」と「ファアパラギを表象する輸入服」の二分法では理解できないことを示している。では、「衣」を通して考察される<サモアラしさ>の再構築はどのように考えられるのであろうか。それについては少なくとも次の3点が指摘できるだろう。まず、女子高校生たちによるサモア服と輸入服の区別の主たる基準は「サモアの文化」である。しかし、「サモアの文化」と一言で語られたサモア服には、1) 単なる腰布、プレタシ、樹皮布といった衣服の種類、2) 体を包むような古い時代の服装、3) 自宅で日々着用するもの、そして、4) 教会や儀礼交換といった礼儀作法が重視される場で着用するものというようになり多岐の意味があった。ここから、サモア服を通して語られる「ファアサモア」はまさに Meleisea が指摘するような柔軟性

のある日常実践として再構築されていると考えられるだろう。

第2に、サモアの伝統・慣習として称される「ファアサモア」はそれを再生産する日常実践だけではなく、現代ではある種の公式性も帯びるようになってきているといえる。例えば、Colchesterはポリネシアの衣服について、「とりわけ19世紀のヴィクトリア朝文化をそのまま引き継いだような、身体をすっぽりと包み込むようなスタイルの女性たちの衣服はこの地域におけるキリスト教化と植民地主義の痕跡を表象するだけでなく、現代におけるある種の文化的執着を示したり、より近代的な場面における正装として好まれたりするようになっている」と指摘している (Colchester, 2003: 1-3)。サモアにおいて、この指摘に相当するのは女子高校生たちによって“サモア服”の筆頭として挙げられたプレタシである。男性の正装や晴れ着はコンテクストに応じて変化するが、女性は教会、儀礼交換の場、職場、文化の日や伝統的な踊りの場と様々な場面において必ずプレタシを着用する (表1参照)。その結果、プレタシはサモアの「伝統」だけでなく、公式な場における「正装」や「適切な服装」といった意味も含んでいる。特に、大学図書館の服装規則にみられるサモアの文化的価値の維持は公的な場所が<サモアらしさ>を明示する場所であることの必要性を示しており、そこには「村」の日常実践とは異なる「ファアサモア」の存在が窺われる。このように考えると、基本的に「ファアサモア」はマタイシステムに基づく概念であるが、サモアにおいてマタイシステムが維持されないところでは異なる意義をもつ「ファアサモア」が構築されているとも考えられるだろう。

最後に、「ファアサモア」として問題になるのは衣服の種類ではなく、着用の仕方である。概して、聞き取り調査に協力してくれた5名の学生はみな質問票の問いの意味を理解できたといい、うち4名はその違いを意識することもあるとも語った。しかし、聞き取りの時に、学生たちが“サモア服”と“輸入服”のそれぞれを定義するのに時間がかかったのを見ると、例えば生徒フィツが語るように、彼女たちは日頃はそのような違いは意識していないと考えるのが妥当である。また、彼女たちがどちらを着用したいのかについて説明した際に、重視されていた点は「何を着るのか」で

はなく「どのように着るのか」である。それは、1つには生徒フィツ以外の学生がとりわけ母親が服装について厳しいと語っているように、下半身の露出の程度の問題である。また、もう1つには、例えば、生徒ルアの客人がくるときには腰布をまとうという話にあるように、それが1つの作法として認識されている点が注目される。実際に、サモアの「村」では腰布をまとうことで足をみせないという所作は長老たちの会議の場や牧師館を訪問する際にジェンダーに関係なく観察され、それは相手に尊敬 (respect) の心情を表現した「ファアサモア」の日常実践として理解できるのである。このように考えると、「ラヴァラヴァ (腰布)」ではなく、「ラヴァラヴァを巻く」という行為が<サモアらしさ>を表象することになるのではないだろうか。そうすると、「衣」に関するどのような行為が<サモアらしさ>の再構築と結びついており、それがジェンダーによってどの程度異なるのかに関してはさらなる調査・検討が必要であろう。

## 5. まとめ

本稿では、サモアの「衣」の日常実践から考察される<サモアらしさ>の再構築について考察を試みてきた。サモアの服装規則の数々はサモアの文化・慣習を称する「ファアサモア」が「ファアパラギ」との対比に基づいて認識される傾向があり、それがとりわけ女性の服装によって視覚的に明示されることを示唆していた。単純に言えば、<サモアらしさ>は女性が“サモア服”を着用することで達成されると仮定できるのである。しかし、女子高校生による“サモア服”と“輸入服”についての語りは双方が明確に区別されえないこと、そして、“サモア服”と呼ばれるものの着用がつねにマタイシステムを基盤とした「ファアサモア」の日常実践に限られないこと、さらに、衣服の種類ではなく、その着用の仕方が<サモアらしさ>を明示する可能性があることを窺わせた。女子高校生たちは基本的に自分の服が<サモアらしさ>をまとっているかどうかは考えていないし、海外からやってくるファッションも積極的に受け入れている。こうした彼女たちの柔軟性はまさに「ファアサモア」が再構築されていくプロセスを示しているといえるだろう。



<サモアらしさ>を含む「ファアサモア」は日常実践に基づいているゆえに、サモア人の日常の中で少しずつ再構築されざるを得ない。今回の考察で明らかになった点の1つは、衣服の種類ではなく、衣服に付随する行為と状況が、マッシーの指摘するような「場所」の特異性をつくりだしていくという点である。しかし、一次資料が限られた本稿では、なぜ服装規則が若い女性たちの服装を対象とするのかについて、十分な考察がなされなかった。また、そうした服装規則が果たしてサモアの「場所」の特異性と結びついているのかについての分析も今後の課題となる。これに関しては、若い男性を対象とした服装観の調査とともに、「ファアサモア」に基づくセクシュアリティについて検討が必要となるだろう。さらにいえば、本稿ではサモアの「衣」におけるグローバル化の状況が十分に呈示できなかった。これについては、「衣」のもつ他の実用的・社会的側面からグローバル化とローカル化の相互作用を検討することが重要である。

#### 【謝辞】

Sカレッジにおける調査は当時青年海外協力隊員であった野沢朋代氏の協力を得て行なわれた。調査の許可を与えてくれた校長先生および調査に協力してくれた女子学生の皆さんとあわせてここに御礼申し上げます。

#### 【文献】

- 千田有紀 (2002) : 「フェミニズムと植民地主義—岡真理による女性性器切除批判を手がかりとして」『大航海』No.43, pp.128-145.
- アン・ホランダー (中野香織訳) (1997) : 『性とスーツ—現代衣服が形づくられるまで—』白水社 : 東京, 285 + vi p.
- 山本真鳥 (1997) : 「サモア人のセクシュアリティ論争と文化的自画像」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化—人類学のパースペクティブ』新曜社 : 東京, pp.152-180.
- ジェームズ・ワトソン編 (2003) 『マクドナルドはグローバルか—東アジアのファーストフード』新曜社 : 東京, 305p.
- Colchester, C. (2003) 'Introduction', in Colchester, C. ed. *Clothing the Pacific*. Berg: Oxford, pp.1-22.
- Harvey, D. (1996) 'From space to place and back again', in Harvey, D. *Justice, Nature & the Geography of Difference*. Blackwell: Massachusetts, pp.291-326.
- Massey, D. (1996) 'A global sense of place', in Daniels, S. and Lee, R. eds. *Exploring Human Geography: A Reader*. Halsted Press: New York, pp. 237-245. [reprinted in full from *Marxism Today*(June 1991)].
- May, J. (1996) 'Globalization and the politics of place: place and identity in an inner London Neighborhood', *Transactions, Institute of British Geographers NS21*, pp.194-215.
- Meleisea, M. (1987) *The Making of Modern Samoa: Traditional authority and colonial administration in the modern history of Western Samoa*. Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific: Suva, Fiji.
- Stanley, D. (1999) *Tonga ~ Samoa Handbook*. Moon travel handbooks, Moon publications: California, USA (1<sup>st</sup> edition).
- Talbot, D. and Swaney, D. (1998) *Samoa: Independent & American Samoa*. Lonely planet publications: Hawthorn, Australia (3<sup>rd</sup> edition).

#### 【注】

- 1) マタイシステムとはマタイと呼ばれる首長称号保持者たちによって管理されるアイガ (大家族/親族関係) とヌウ (村/地縁関係) の関係に基づいた独自の社会システムである。村は基本的にマタイたちの合議体であるフォノによって統治されている。このシステムにおいて、個人はアイガとヌウの中にジェンダーと年齢による明確な位置をもち、それにしたがってアイガの繁栄のために行動することが期待される。
- 2) 「村」における「適切な服装」はサモアに滞在する外国人にとっても常識であり、著名な旅行ガイドのロンリープラネットでは、「してはならないこと (Dos and Don'ts)」の10の項目の5番目に「村や遠隔地では、気温に関わらず、女性は膝丈のスカートカラヴァラヴァをはくことが強く推奨され、ショートパンツをはくことは避けること」(Talbot and Swaney, 1998 : 28) と述べられている。また、別のガイドブックでは「ファアサモア」の欄で「パブリックヌーディズム (public nudism) は禁止 : 村を歩く時は体を包むこと。特に女性はスラックスやショートパンツではなく、プレタシヤラヴァラヴァを着用すれば、より尊敬的に扱われる」(Stanley, 1999 : 105) とある。
- 3) モアタア村は首都アピアの中心部から車で10分ほどのところにあるアピア周辺の村の1つである。この村はアピア周辺の村にしてはマタイシステム(注1参照)が維持されており、フォノが強い権力をもっているという。
- 4) サマタウ村はアピアの中心部から車で2時間以上離

- れたいわゆる農村部の村である。アピア中心部に比べるとマタイシステムがしっかり機能している。
- 5) サシナ村はサヴァイ島の北側に位置する村である。概して、サヴァイ島はサモアの伝統的な慣習と文化を最も維持しているところとみなされている。
  - 6) 乾燥させたパンダナスの葉で編まれる細編みゴザのこと。イエ・トガは儀礼交換の際に使用される交換財として高い価値を有している。
  - 7) 大学に勤務しているある先生はこの規則が主席司書官によって勝手に決められたものであるというが、配布されていた服装規則の用紙にはそれが2000年5月に大学の管理運営委員会 (Management Committee) で承認され、それから施行されたことが明記してあった。
  - 8) ナイトクラブにくる若い男性たちは禁止された服装よりもむしろ既製のショートパンツかジーンズにオフ・ティーノ (開襟シャツ) かTシャツを着用している。
  - 9) 女子学生たちが「サモア服」と「輸入服」の意味を理解できないことを想定し、前者には「プレタシ、ラヴァラヴァ」、後者には「ジーンズ、ミニスカート、ズボン」という事例を付け加えたため、質問はかなり恣意的なものになったといえる。
  - 10) 他の質問項目との関連性をみると、第1に、「将来の夢」において、テラーや縫子 (sewer) になりたいと希望した学生はサモア服を、弁護士、パイロット、科学者、医者、フライトアテンダントといった高等教育を必要とする職業を希望した学生は輸入服を選択する傾向にあった。第2に、会計など他の選択科目の成績において比較優位の点から家政科を選択した (つまり消極的に家政科を選択した) 学生は輸入服を好む傾向にあった。
  - 11) ここでいうフェアウとは年配者に申しつけられることであり、具体的には教会や村の組織に関わる用事などに従事することを意味する。
  - 12) 学校で行われる行事の一つであり、学生たちに「伝統」的な踊りを躍らせたり、サモア独自の食事を食べさせたりして、サモア文化を再認識させるような日である。

---

くらみつ みなこ

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科助手